

水晶が好きだった宮沢賢治(3)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

3. 非晶性シリカ鉱物(準鉱物)オパール(蛋白石)

オパール(写真6)は完全な潜晶質であるため、厳密には準鉱物ですが、国際鉱物学連合ではオパールを正式な鉱物としています。日本語名は蛋白石で、名前の由来は鶏卵の白身に似ているためとされています。英語のopalは、ギ

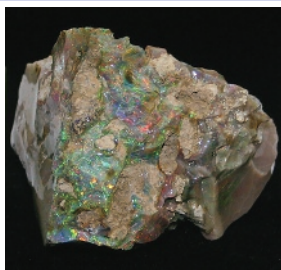


写真6. オパール
(コモンオパール(左)とプレシャスオパール(右)、蛋白石)
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/opal>)

リシア語opaliosやラテン語opalusに起源を持ち、これらの語は、サンスクリット語で(宝)石を意味するupāla[s]に起源があると考えられています。賢治がオパールを扱った作品では、ユーモアとスリルにあふれる『^{なら}榎ノ木大学士の野宿』が特によく知られています。

宝石学の専門家、榎ノ木大学士は、「貝の火兄弟商会」の赤鼻の支配人から上等の蛋白石(オパール)探してほしいと依頼を受け、大学士はそれを受けて宝石探しの旅に出かけます。野宿第一夜は河原で寝て、四人兄弟の岩頸(マグマが硬化してきた岩山)の会話の夢を、第二夜は石切り場の鉱物たちが話し合っている夢を、第三夜は海岸の崖の洞で恐竜に食べられそうになる夢を見ます。しかし、榎ノ木大学士は何の成果も得られずに帰り、支配人は困ります。大学士は支配人に旅費の袋を投げつけて帰れと怒り、支配人は袋を拾って帰るしかありませんでした。大学士は葉巻をくわえて、天井を斜めに見ながらにやっと笑ったというお話です。この童話の最後で、大学士はおもしろいことを言っています。

「実際蛋白石ぐらゐたよりのない宝石はないからね。今日虹のやうに光^にってゐる。

あしたは白いたゞの石になつてしまふ。今日は円くて美しい。あしたは砕けてこなごなだ^{なら}」。

『榎ノ木大学士の野宿』

ガラス質の石英が多く入っている岩石が流紋玻璃と言われる鉱物です。オパールは、ガラス質の石英の微細な粒と水の分子が結合してできている鉱物ですので、大学生のように、宝石になるようなオパールは、流紋玻璃のすきまにできていることが多いそうです。賢治は、よくオパールの性質を理解していたことがわかります。

また、「貝の火」という物語では、オパールが変質していく様子を次のように美しく表現しています。

「玉は赤や黄の^{ほのほ}焰をあげてせはしくせはしく燃えてゐるやうに見えますが、実はやはり冷たく美しく澄んでゐるのです。目にあてて空にすかして見ると、もう焰は無く、天の川が綺麗にすきとほってゐます。目からはなすと又ちらりちらり美しい火が燃えだします。」

「それはまるで赤や緑や青や様々の火が^{はげ}烈しく戦争をして、地雷火を^{ちらいくわ}かけたり、のろしを^{ひらめ}上げたり、又いなづまが閃いたり、光りの血が流れたり、さうかと思ふと水色の^{ほのほ}焰が玉の全体をパツと占領して、今度はひなげしの花や、黄色のチュウリップ、^ば薔薇や^らほたるかづらなどが、一面風にゆらいだりしてゐるやうに見えるのです。」

『貝の火』

この文章を読むだけで、オパールの素晴らしい美しさが目に浮かび、感動してしまいます。

ここに紹介したように、賢治はいかにシリカ鉱物類をよく観察し研究して作品に取り入れていたかがわかります。来年2026年は、賢治の生誕130年の記念の年となりますので、これを機に、大阪市立科学館の鉱物標本をご覧になりながら、賢治の作品を味わってみるのはいかがでしょうか？

[参考文献]

- 1) 『宮沢賢治全集1～10』ちくま文庫(1986～1995年)
- 2) 板谷栄城『宮澤賢治 宝石の図鑑』平凡社(1994年)
- 3) 板谷栄紀『賢治博物誌』れんが書房新社(1979年)
- 4) 北出幸雄『宮沢賢治と天然石』青弓社(2010年)
- 5) 加藤碩一・青木正博『賢治と鉱物』工作舎(2011年)
- 6) 桜井弘『宮沢賢治の元素図鑑』化学同人(2018年)
- 7) 桜井弘『『銀河鉄道の夜』の元素と鉱物の世界』14回連載 現代化学(2019～2020年)

桜井 弘